

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：37102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02241

研究課題名（和文）東アジア山岳宗教研究の基盤形成 日本・中国・韓国の国際比較研究から

研究課題名（英文）Establishing a Foundation for the Study of East Asian Mountain Religions: An International Comparative Study of Selected Highland Regions in Japan, China, and Korea

研究代表者

須永 敬 (SUNAGA, TAKASHI)

九州産業大学・国際文化学部・教授

研究者番号：90390004

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、北部九州の英彦山（日本）、華北平原の泰山（中国）、朝鮮半島南部の智異山（韓国）における山岳宗教について、(1)山岳聖地観の比較研究（自然と山岳宗教）、(2)宗教実践の比較研究（心意と山岳宗教）、(3)宗教制度の比較研究（社会と山岳宗教）の三つの視点から研究をすすめた。上記の観点から、東アジア山岳宗教の共通性と差異、およびその社会的・制度史的背景を究明することにより、東アジア山岳宗教の比較研究の基盤を築くことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本・中国・韓国の代表的山岳霊山について、自然と山岳宗教・心意と山岳宗教・社会と山岳宗教という3つのアプローチからの比較検討を行った。東アジアの山岳宗教相互が、いかなる共通性と差異を有するのか、いかなる関係性にあるのかを考察・解明することは、東アジアの比較宗教研究に一つのプラットフォームを提供することであるとともに、社会的課題としての東アジア相互理解の促進につながる研究としての意義を有している。

研究成果の概要（英文）：This study comparatively investigated the mountain religions of Mount Hiko in the northern Kyushu region of Japan, Mount Tai in the North China Plain, and Mount Jiri in the southern Korean Peninsula. It utilized the following three comparative perspectives: (1) vistas in which the sacred mountain sites are located (nature and mountain religions), (2) religious practices (spirituality and mountain religions), and (3) religious institutions (society and mountain religions). The study created a foundation for comparative studies of East Asian mountain religions by investigating the commonalities and differences between East Asian mountain religions and their social and institutional historical contexts.

研究分野：宗教学・民俗学・歴史学

キーワード：山岳宗教 修験道 英彦山 泰山 智異山 国際情報交換

1. 研究開始当初の背景

東アジアにおける比較宗教研究の地平を切り拓くうえで、山岳宗教（仏教の山林修行、儒教の祭祀、道教の入山修行、風水の龍脈選定、神道の神体山、修験道の峰入修行、など）の存在を無視することはできない。だが、東アジア山岳宗教の比較という問題関心のもとに行なわれた研究事例はほとんど見られないのが現状である。

たとえば、日本における代表的な山岳宗教である修験道は、他国に類の無い宗教として、日本の「固有信仰」ないしは「民俗宗教」と位置づけられており、いわば「一国宗教史」的な立場によって研究が進められてきたといえる。このような研究スタンスは、韓国・中国における山岳宗教研究にも同様に認めることができる。

このようななか、近年北部九州をフィールドに進められている中世考古学や歴史学の研究成果は、東アジアの山岳宗教交流が歴史的に持続していたことを証明している。東アジアにおける山岳宗教の近似と差異を考察し、それを宗教史的に位置づける視点の構築が必要とされている。

2. 研究の目的

西欧中心に進められてきた世界の宗教研究に対して、東アジア宗教研究に関する共通の基盤構築と、そこからの成果発信は、今日の急務とされている。また、東アジアの比較宗教研究を考えるうえで、山という自然と宗教との関係性という課題は重要なテーマとなりうるが、山岳宗教の研究は各国個別に進められており、比較研究の事例が乏しいのが実態である。

本研究では、日本・中国・韓国の代表的山岳霊山について、自然と山岳宗教・心意と山岳宗教・社会と山岳宗教という3つのアプローチから比較検討を行い、東アジア山岳宗教研究の比較研究の基盤を築く。東アジアの山岳宗教相互がいかなる関係性にあつたかを相対的な立場から論じることにより、それぞれの特徴を明らかにすることが可能となるのである。

3. 研究の方法

東アジア山岳宗教の特徴を効率的・効果的に把握するため、北部九州の英彦山（日本）、華北平原の泰山（中国）、朝鮮半島南部の智異山（韓国）を調査対象に定めた（図1）。このような調査地の限定は、とかく印象論に陥りやすい比較研究を、具体的かつ精緻な分析のなかから論じることが可能とする。申請者は平成28年度まで挑戦的萌芽研究「日韓山岳宗教の比較研究」を実施してきたが、日韓の比較のみでは相互の関係性を十分に確定することはできない。ここに、東アジアの文化史上最も重要な影響力を持っていた中国の視点を取り入れることで、川田順造の提唱する「文化の三角測量」の条件を整えることができた。

また、研究期間中には、(1)聖地観（自然と山岳宗教）、(2)宗教的实践（心意と山岳宗教）、(3)宗教制度（社会と山岳宗教）という3つのテーマを設け、各年度の重点調査事項に据えた。なお、本研究の遂行にあたっては、英彦山神宮・宗教法人神理教・添田町役場・泰山学院泰山研究院（中国）・国立慶尚大学校（韓国）・国立順天大学校（韓国）の協力と助言を得ることができた。



図1 英彦山・泰山・智異山の位置 (Google MAP を加工)

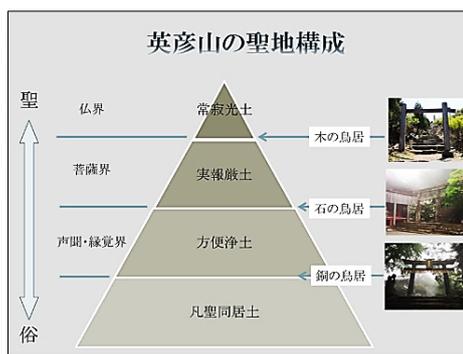


図2 英彦山の聖地構成

4. 研究成果

(1) 山岳聖地観の比較研究（自然と山岳宗教）

山という自然環境の中に展開する山岳宗教において、洞窟・巨石・河原・滝といった自然は宗教的にどう解釈されているのであろうか。研究の初期段階に予想していた通り、英彦山（日本）・泰山（中国）・智異山（韓国）のいずれにも、上記のような自然環境が聖地として認識されていることを確認できた。このような特徴は世界の諸宗教においても見られる普遍的なこととも考えられるが、将来の世界宗教比較研究を見据える上でも、東アジアにおける共通点や差異について検討を進める必要がある。

たとえば聖地構成については、英彦山では鳥居（銅の鳥居・石の鳥居・木の鳥居）による結界が設けられ、その結界によって凡聖同居土・方便浄土（声聞・縁覚界）・実報厳土（菩薩界）・常寂光土（仏界）といった天台教義に基づく区域が区切られ、認識されていた（『塵壺集』1762年・

図2)。また、泰山には一天門・二天門・南天門など、複数の門による区切りが認められる。それが宗教的にどのように解釈され、位置づけられていたのかは管見の限り不明であるが、俗界から聖なる世界へと登る過程を認識する施設であったことは十分考えられる。一方、智異山においては同様の結界を表示する門や鳥居のようなものは確認できず、山を統一的な聖地構成によって捉えていなかった可能性がある。

また、洞窟聖地についてみると、英彦山には四十九窟といわれる複数の自然窟をセットとして神聖視する信仰が見られる。窟にはそれぞれの守護童子や仏が祀られ、修験者達が籠って行を行っていた。泰山にも山内に洞窟があり、主に道教の道士の信仰対象となっているが、その大きさも用途もまちまちであり、英彦山に類似するような泉を伴った自然窟があるかと思えば、岩を削り抜いて人工的に成形した窟も見られた。さらに、「洞天福地」説により解釈されるという特徴もみられる。また、泰山西方に位置する小泰山には、英彦山同様に複数の窟をセットとしてとらえる小泰山七十二洞の信仰も認められた(図3)。智異山においては、龍遊潭・百巫洞など、巫者たちが祭祀や祈禱を行なう窟が認められる。また、山寺の僧侶たちが夏安居や瞑想行などに用いる窟もみられる。そして、これらはいずれも自然窟を利用している。

このように、山の自然と聖地観の一例を挙げてみたが、そこには多くの共通性が認められる一方で、差異も確認することができた。これには後述する宗教実践や宗教制度に依って生じた差異であると考えられる。



図3 玉皇洞(小泰山七十二洞のうち)



図4 ポサル(巫者)の祭祀(智異山天王ハルメ山神祭)

(2) 山岳宗教実践の比較研究(心意と山岳宗教)

東アジアにおいて、山という自然環境はいくつもの異なる宗教・宗教者を併存・融合させる場となっている。それでは、東アジアの山岳宗教の実践面で、仏教・道教・儒教・風水思想・修験道・神道・巫俗といった諸宗教・信仰はどう展開・習合してきたのであろうか。

英彦山修験道は、その内に神・仏・巫といった要素を内包していた。また、泰山は、儒・仏・道・巫、智異山は、儒・仏・巫(図4)といった諸宗教の活動が見られる。しかし、そのあり方にはやはり異なる点もある。英彦山修験道の場合は、一つの修験教団としての統一性がとられているのだが、その中には神・仏・巫といった宗教要素が渾然一体となって存在している。智異山においては、英彦山のような統一性は見られず、それぞれの宗教・宗教者で活動しているのであるが、巫俗と仏教、儒教といった様々な宗教要素が、個々人の宗教者の中で融合する事例(儒者や僧を自認するシャーマン、など)が多々見受けられた。泰山では、儒・仏・道・巫がそれぞれの拠点を設け、独立しつつ併存するといった状況が確認できた。

また、英彦山修験道で見られる「峯入り」に相当するような宗教実践は、智異山・泰山では確認できなかったが、山と山とを連関させ、宗教的に解釈・説明することは盛んに行なわれている(図5)。それは「峯入り」のような実際の登拝や行ではなく、「風水地理」の知識(「龍脈」など)に基づく、理念的・観念的な解釈行為として行なわれている。

また、英彦山修験に見られるような講社による代参や集団参詣について、泰山では「香社」と呼ばれる日本の講に似たグループによる遠隔地参詣が認められた。ただし、そのメンバーの多くは女性であった。また、そのリーダーや香社を受入れる側の人物は宗教者を兼ねている事例も見られた。智異山ではムーダン(巫者)が山内洞窟での祈禱や山頂への登拝などに信者を同行する事例が認められた。

(3) 山岳宗教制度の比較研究(社会と山岳宗教)

上記(1)(2)にみられる共通性と差異の要因となり、各国の山岳宗教の特徴を規定したのは、近世(江戸時代・宋代・朝鮮時代)以降の山岳宗教に関する社会制度ではないと思われる。

泰山は、泰山は中国五嶽の冠・東嶽であり、古くより皇帝の崇拜(封禪と国家祭祀)や地獄の思想(東嶽大帝と死の信仰)に関する霊山として崇められていたが、宋代に至ると、子授け祈願(碧霞元君と生の信仰)へと信仰の中心が移り、今日では、碧霞元君という女神の山とみなされている。ただし、信仰の全てが取って代わられたという訳ではなく、例えば山頂部をみても、磐座を思わせる玉皇頂、道教の道観である碧霞元君廟、儒教の祖を祀る孔子殿、仏教の観音菩薩を祀る観音殿など、さまざまな宗教や宗教施設が併存している(図6)。



図5 智異山青鶴洞図（智異山・天帝宮）

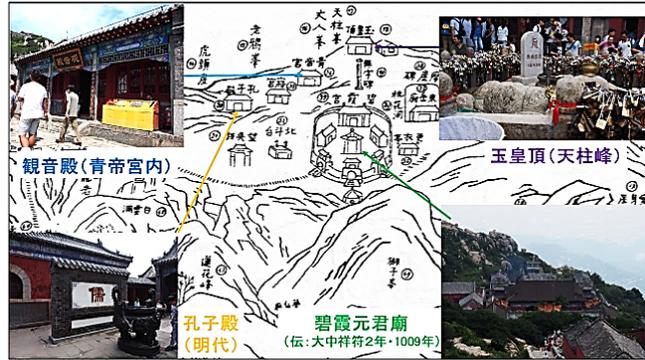


図6 泰山山頂部における諸宗教の併存

智異山には、「智異山」の山号を持つ寺院や庵を 1935 年時点で 45 箇所確認できるのだが、これらを一体として捉える発想は見られない。寺院の本末制度もあるにはあるが、これは日本統治下の寺刹令の名残であり、所在地による区切りという以上の意味は有していない。それぞれの寺院は独立性が高く、寺院の位置する尾根筋や谷ごとに個別の宗教世界を形成している。このような個別性は、朝鮮時代の仏教弾圧による廃寺や、寺院間連携の阻害などに依るものと考えられる。また、巫者たちも智異山の巫者としての一体性はなく、その活動も関係性も一代限りのものである。智異山ではこのような宗教・宗教者の個別・分散化が際立っている。

では、英彦山はどうであろうか。修験道時代には英彦山霊仙寺と英彦山座主を中核として、300 を超える坊が英彦山修験としてまとまっていた。ただ、その実態は、修験者に「惣方」（神事）、「行者方」（峯入）「衆徒方」（仏事）といった区別があるように、多様性を内包したものであった。しかし、明治 5 年の修験廃止令を受けて、神道化した英彦山神社の宮司となった座主（高千穂氏）と 3～4 名の神職を残し、他の修験者は全て氏子身分となり、宗教活動が禁じられてしまった。その状況を打開するため、英彦山神社の附属講社を結成したり、あるいは教派神道神理教の附属教会を開設したり、あるいは修験復興を掲げて独自に宗教活動を展開したり、英彦山の霊威を感じた民間宗教者が集まってくるなど、その活動は個別・分散化するに至った。修験廃止以降、今日までの英彦山の宗教状況を見ると、前述した智異山の状況とほぼ同じ状況にあるといえる。

以上、(1)～(3)の三点を中心に、研究成果の概略を述べた。英彦山（日本）・泰山（中国）・智異山（韓国）という三霊山の調査研究と比較によって、東アジアにおける山岳宗教の共通点や差異点が浮き彫りとなり、今後の比較考察に繋がる基盤を築くことができたと思う。ただし、本研究の実施期間は、北部九州豪雨や COVID-19 などの災害に翻弄された期間でもあった。今後さらなる現地調査を実施することにより、よりその実態を詳らかにしていく必要がある。また、今回の考察は、決して日・中・韓の全ての山岳宗教の特徴を述べたものではない。今後はそれぞれの国内の他霊山との比較検討も必要になると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 須永 敬	4. 巻 79
2. 論文標題 北部九州における修験霊山の神道化と教派神道	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州産業大学国際文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 50-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 須永 敬	4. 巻 77
2. 論文標題 英彦山と神理教 教祖佐野経彦日誌の分析から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州産業大学国際文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 141-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 須永 敬	4. 巻 72
2. 論文標題 明治期英彦山信仰をめぐる神社派・教会派・修験派の対立	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『九州産業大学国際文化学部紀要』	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 須永 敬	4. 巻 7
2. 論文標題 近現代における英彦山信仰の 分散 と 統合	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 九州山岳霊場遺跡研究会資料集	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須永 敬	4. 巻 -
2. 論文標題 日中山岳聖地の比較研究 日本・英彦山と泰山の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年世界名山研究及び山岳文化と観光の融合発展に関する国際会議論文集（原文中国語）	6. 最初と最後の頁 303-312
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 泰山の山岳聖地とその信仰 東アジアから修験道を逆照射する
3. 学会等名 日本山岳修験学会第41回富士山学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 北部九州における修験霊山の神道化と教派神道
3. 学会等名 西日本宗教学会第11回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 現代韓国における山岳宗教の諸相 智異山「聖母」神をめぐる巫・仏・儒の宗教実践 -
3. 学会等名 福岡日韓フォーラム第154回研究例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 日本古典文学中的泰山（日本古典文学のなかの泰山）
3. 学会等名 泰山学院泰山研究院 中日山岳宗教交流研究学術講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 日本の山岳宗教とその聖地観 - 日本九州・英彦山修験道の事例から -
3. 学会等名 泰山学院外国語学院学術報告会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 修験道の山 英彦山
3. 学会等名 日本山岳文化学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 英彦山と神理教 教祖佐野経彦日誌の分析を中心に
3. 学会等名 西日本宗教学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 近現代における英彦山信仰の 分散 と 統合
3. 学会等名 第7回九州山岳霊場遺跡研究会（研究報告&シンポジウム「英彦山と神仏分離」）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 失われた 修験道 を求めて 現代英彦山における修験復興運動について
3. 学会等名 西日本宗教学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 須永 敬
2. 発表標題 日中山岳聖地の比較研究 日本・英彦山と泰山の事例から
3. 学会等名 2022年世界名山研究及び山岳文化と観光の融合発展に関する国際会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 李森ほか編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新華出版社（中国）	5. 総ページ数 396
3. 書名 『全球的視野下の泰山文化』	

1. 著者名 九州山岳霊場遺跡研究会編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 -
3. 書名 九州の山岳霊場（仮）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------